2109　離島覚書（広島県厳島）

宮島口から厳島を望む

令和３年７月 13 日

日本三景

厳島（いつくしま）は仕事の関係で近くを幾度も通っているが、何時でも行けると思っていたせいか現在まで一度も足を踏み入れたことがなく、今回が初めての訪問となった。広島県内の島はこれまで厳島を除いて踏査しているので、広島県内の島旅の最後となる。

厳島は「安芸の宮島」と呼ばれ、宮城県の松島、京都府の天橋立と並ぶ日本三景の一つである。江戸時代以降、宮（神社）がある島なので宮島と呼ばれるようになり、現在では２つの名称が使われているが、両者を区別する明確な基準はない。国土地理院や日本離島センターが発行する「シマダス」では厳島と表記しているので、ここでは厳島で統一する。

厳島は、面積 30.33 ㎢、周囲 28.9 ㎞の南北に細い島である。県内の橋が架かっていない島の中では大崎上島に次いで大きい。大野瀬戸を挟んで本土の東側に位置する。本土と厳島の間は狭いところで 500m、広いところでも 2,000mほどしかなく、十分に橋が架けられる距離にあるが、島の人達は反対し、あえて橋は架けられていない。

ＪＲ山陽本線と広島電鉄の宮島口駅から徒歩５～６分で宮島口桟橋に着く。厳島に渡るフェリーは宮島松大汽船とＪＲ西日本宮島フェリーの２社が運航しており、両社で各１日 50 便ずつ、合わせて 100 便がひっきりなしに本土と厳島を往復しており、所要時間は 10 分ほどだ。

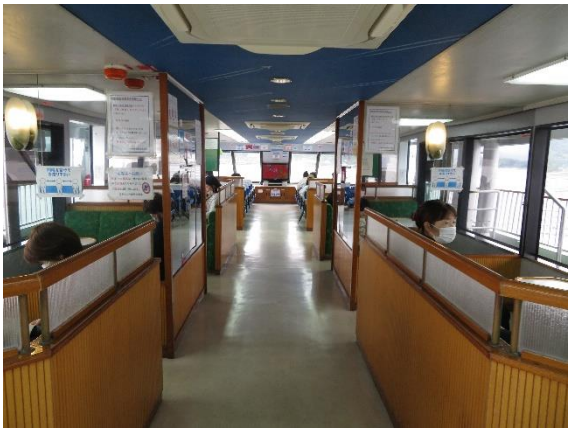
平安時代までこの島には人は住んでいなかった。神主は対岸に住み、祭りの時だけ島に渡った。鎌倉時代の終わりの頃から人が住むようになったが、赤子を生む時は対岸で過ごす時代が長く続いた。死体は今でも対岸に葬られている。したがって島には墓はない。

厳島は 1889（明治 22）年に１島で厳島町、1950 年に宮島町と改称し、2005 年に廿日市市に編入されて現在に至る。2015 年の国勢調査時の厳島の人口は 1,674 人、世帯数は 876 戸であった。島の人口のピークは 1947 年の 5,197 人で、その後減少の一途を辿っており、現在は当時の 1/3 ほどに減少している。世帯数は昔から「宮千軒」と呼ばれるように 1,000 戸ほどで横ばいだったが、その後、徐々に減少してきている。ただ人口の減少ほど顕著ではな

いから、一人暮らしの世帯が増加していることを示している。なお高齢者の占める割合は2015年の時点で42.8%に達している。

集落は厳島神社の周辺に形成されているが、後述するように島の北部の杉ノ浦に漁業集落、島の東岸の大砂利というところに戦後開拓された農業集落がある。ただし大砂利は現在、２世帯しか住んでいないようだ。

今回の厳島行は大学時代の同級生で、全漁連に勤めていた矢部憲男君が帯同した。前泊地の広島からＪＲ山陽本線で宮島口に出て、バックパックをこの日宿泊する宮島コーラルホテルに預けて、ホテルの目の前にある宮島口桟橋から９時すぎのフェリーに乗り、宮島に渡った。普段は外国人観光客も多いそうだが、コロナ禍とあって外国人の姿はほとんど見られず、国内の観光客も少ないから、フェリーはガラガラの状態であった。



宮島松大汽船のフェリー（左）、乗客が少ない船内（右）

厳島神社

厳島に到着後、すぐに厳島神社に向かう。「日本三景宮島」と書かれた石柱の門は閉ざされていたので、左折し、通称「清盛通り」と呼ばれる表参道商店街を通る。朝早いためシャッターが下りたままの商店が多い。商店街を抜けると、立派な灯籠、狛犬、そして大きな石造りの鳥居が見えてきた。ここから海岸沿いの道路を進むと厳島神社である。参拝料と宝物館の入館料がセットになっており、500円を支払って神社に入る。

厳島神社は593年にこの地方の有力豪族の佐伯鞍職が社殿を創建したのが始まりとされているが、1168（仁安３）年に平清盛が社殿を造営し、現在と同じ規模の社殿が整えられたとされている。平家一門の隆盛とともに厳島神社も栄えて、平家が氏神になった。

平家滅亡後も源氏をはじめとする時の権力者の崇敬を受ける。1207（建永２）年と1223（貞応２）年の２度にわたる火災で全て消失、現在の社殿は仁治年間（1240～1243年）以降に営造されたようだ。

戦国時代には社勢が徐々に衰退するが、毛利元就（もとなり）が1555（弘治元）年に「厳島の戦い」で勝利を収めて支配下におき、厳島神社を崇敬するようになると、再び隆盛し、元就は大掛かりな社殿修復を行った。ちなみに厳島の戦いは、1555（弘治元）年に厳島を戦場として毛利元就と陶晴賢（すえはるかた）との間で起きた戦争である。元就は厳島を戦場としたことを恥じ、神社を再興したといわれている。

明治政府によって廃仏毀釈が進められると、厳島神社は仏式と判断され、社殿の彩色は全

て剝ぎ落された。明治末期になってようやく破壊された部分が復旧し、現在の姿になっている。

厳島は 1996 年 12 月にユネスコの世界文化遺産に登録された。厳島境内と背後の弥山斜面の西 432.2ha がその範囲となっている。

入口を入ると、客神殿、本殿、大口神社、天神社が並び、大鳥居の前に高舞台、左右の楽房、能舞台が回廊で結ばれている。回廊の総延長は約 275mに及ぶ。社殿は寝殿造りで、鮮やかな朱塗り、檜皮葺（ひわだぶき）の荘厳な屋根は国宝にふさわしい。建物は潮間帯につくられており、ちょうど満潮時にさしかかっていたので、海水が建物の下まで進入しており、まさに海に浮かぶ神社を実感できる。本社の拝殿、祓殿は鎌倉時代の 1241（仁治２）年に再建された日本最古のものだ。

厳島神社の社殿（左）、厳島神社の回廊（右）

大鳥居

海に立つ厳島神社の大鳥居はあまりにも有名である。過去に何回か本土側から眺めた記憶があるが、この大鳥居がちっとも見当たらない。本殿の前まで来て、じつはこの大鳥居が修理中で、周囲には足場が組まれ、工事用ネットで覆われていることに気づいた。旅から戻ってインターネットで確認すると、1875（明治８）年に建立された大鳥居は 145 年が経ち、損傷や老朽化が進んだことから 2019 年６月より大規模な保存修理工事に入っていたのだった。修理が終わるまでさらに１年ほどがかかるらしい。

鳥居は神社の出入口に建てられるものだが、厳島神社の出入口は海上である。社殿から約 160m沖の海上に北西を向いて立っている。高さ約 16.6m、屋根の長さは約 24.2mの巨大な鳥居で、木造の鳥居としては日本最大で、国の重要文化財に指定されている。1875 年に建てられた第８代目にあたる現在の鳥居は、宮崎県と香川県から切り出したクスが使われている。クスは耐久性や耐水性に優れ、樟脳の原料にもなることから防虫効果も高い。なお 1950 年には後述する根継ぎの修理が行われているが、この時は佐賀県から伐採したクスが使われている。主柱の周囲は 10m近くになる。これほどのクスの大木は国内にはなかなか見つからないから材料の確保に苦労したことだろう。

何かのクイズで知ったのだが、この鳥居は屋根の真下にある笠木と島木といわれる部分が箱状になっていてここに約４トンの小石が詰まっているそうだ。この小石と鳥居の自重で立っている。つまり柱を海底に突き刺しているわけではない。鳥居の柱を支えているのは

千本杭と呼ばれるもので、水に強いマツの丸太を多数埋め込み、６本の千本杭の上に鳥居の主柱２本と袖柱４本が立っているわけだ。この鳥居の総重量は約 60 トンと推定されている。

鳥居の柱の部分は海水に浸ったり干上がったりするので傷みやすい。この大鳥居もそうだが、回廊の部分の柱も傷むと新しい木材に取り換える「根継ぎ」と呼ばれる修理が定期的に行われている。

厳島神社では、大阪の四天王寺から伝わった舞楽が毎年１月、２月、４月、５月、旧暦の６月５日、10 月に行われる。大鳥居の正面に位置する本殿前の高舞台で演じられる。舞台の両サイドに楽房という楽器を演奏する場所が設けられている。

西回廊を出口に向かうあたりに能の舞台がある。現在わが国には重要文化財に指定されている能舞台が５つあるそうだが、そのうちの１つで、しかも海に浮かぶ能舞台としては唯一である。現在の能舞台が造られたのは 1680（延宝８）年のことであった。能の舞台として使われる他、茶道の表千家と裏千家の家元が隔年交互に行う献茶祭ではここでお茶がたてられ神前に献じられるそうだ。

修理のために足場が組まれた大鳥居（左）、根継ぎ修理された回廊の柱（右）

宝物館と大願寺

神社の脇に溝川という小さな川が流れている。この川のほとりに小中学校の修学旅行生が目立ち始めた。宿に泊まっていた人たちが動き出したようだ。厳島は日本有数の観光地で、コロナ禍の前には年間約 450 万人の観光客が訪れていた。フェリーが１日 100 往復しているのはその証である。近年は外国人の増加が目立ち、2018 年には 35 万人に達していた。ところが昨年来のコロナ禍で観光客は激減しているから、島の経済は大きな痛手を被っているに違いない。

厳島神社を出た先に宝物館がある。神社の参拝料と合わせて入館料を払っていたので、チケットを見せ、靴を脱いで館内に入った。1934 年に造られた当時としては珍しい鉄筋コンクリート製である。柱の表面には漆が塗られているらしい。ここには厳島神社が所有する約 4,500 点所蔵品の一部が展示されている。

館内には平家一門がその繁栄を祈って奉納した平家納経の複製が展示されていたが、一糸乱れぬ、緊張感が伝わる書は圧巻であった。この他に、刀剣や鎧甲、能楽の装束や面、絵画などが展示され、最近のものでは藤原雄作の備前焼の壺と花生が置かれていた。

厳島は幕末まで神仏混淆（こんこう）で、島内には大願寺と大聖院という２つの寺があった。宝物館の

脇にある大願寺は真言宗の古刹で、明治維新後に実施された廃仏毀釈までは、厳島神社の修理、造営を司ってきた寺であった。本堂奥の書院は第二次長州戦争の際に勝海舟と長州藩の藩士らが講和会議をした場所としても知られている。

厳島神社の宝物館（左）、大願寺（右）

宮島歴史民俗資料館

宝物館と大願寺の間の道を進んだ先に、宮島歴史民俗資料館がある。江戸時代の後期から明治期にかけて醤油を醸造していた豪農の旧江上家の母屋と土蔵を展示施設の一部とした厳島の歴史と文化が学べる資料館で、1974 年にオープンした。展示は４つのコーナーに分かれている。

古い庭園を囲むように４つの展示館が回廊のように並ぶ。展示館Ａは山仕事の鋸、甕、蒸籠など厳島で古くから使われていた道具類が展示されている。展示館Ｂは厳島で開催されている祭りや能に関する写真や資料がまとめられている。展示館Ｃは厳島の生業であるもみじ饅頭、杓子、ロクロ細工、木匙、宮島彫などの製作工程や道具類を見ることができる。展示館Ｄでは厳島の歴史や平清盛の足跡、絵画や屏風などの作品などが展示されている。ゆっくり見れば１～２時間ほどかかる充実した内容で、ここにくれば厳島の全てが要領よくつかむことができる。

この資料館のはす向かいに北大路魯山人美術館があった。2020 年３月にオープンしたばかりだが、新型コロナの流行に呪われたような悲劇の美術館といえよう。

歴史民俗資料館として使われている旧江上邸（左）、旧江上邸の庭園（右）

シカ

朝方、弥山(みせん)の頂上は雲に覆われていたので、頂上に登っても眺望は期待できないと諦めていたが、時間が経つうちに頂上に雲はなくなった。厳島神社の裏手から弥山へのロープウエーの駅のある紅葉谷に向かった。

途中、シカの群れに出くわした。厳島では古くからシカは大切に扱われ、給餌が行われてきたため野生のシカであるにも関わらず、人に慣れている。逃げることはない。厳島に生息するこのシカはニホンシカで、約 6,000 年前に宮島が島になった時に本土側の個体群から分断されたと考えられている。表参道の商店街や市街地にも人を恐れずに闊歩していたが、市街地を離れ山に近づくとシカは群をなしているようだ。

戦後、シカの個体数は激減したが、住民による保護対策が功を奏して個体数は回復する。その後、観光の一環として鹿煎餅が販売され、加えて 1979 年からシカの繁殖保護のため給餌が始まり、1960～1970 年代にかけて個体数は激増した。そのためシカの糞、植木や生垣の食害、角で突かれたり、自動車との接触事故などが発生し、次第にシカが増えすぎたことによる問題点が顕在化してきた。

このため 2007 年には鹿煎餅の販売が中止され、シカを市街地から減らしていく対策がとられている。2019 年の調査によると、厳島の北東部に生息するシカは約 600 頭と推定されており、この地域の生息密度は約 100 頭／km^2になるという。厳島のシカは、市街地に定着した個体と夜間を含めてほぼ山の中で過ごすものに分けられるようだが、紅葉谷で遭遇したのは後者の群れだろう。市街地で容易に餌が得られなくなれば、シカは山で餌を求めるようになり、山間部での個体数は増加する。そのことは厳島の植生に大きな影響を与えかねない。世界自然遺産に指定されている鹿児島県の屋久島ではヤクシカの資源が増えすぎて、樹木の皮を食べ、植生への被害が出てきたため毎年一定量を駆除し、その肉は島内で食べられているが、厳島の場合は植生への被害が顕在化するまでには至っていないようだ。しかし個体数の適正な管理を行わなければ、屋久島と同じように駆除が必要になる時が来るかもしれない。

紅葉谷の坂を登っていくと作業をしている人がいたので、ロープウエーの紅葉谷駅への道を聞く。ところがロープウエーは定期点検中で本日まで運休しているとのこと。明日 9 時から運行が再開されるとのことだ。ちょっとガックリした。紅葉橋を渡り、昼食を食べるべく商店街に向かう。

紅葉谷公園の周辺にいたシカの群れ

五重塔と千畳閣

商店街の手前から階段を登った高台に五重塔が立っていた。厳島ではひときわ目立つ塔でランドマークになっている。この五重塔は 1407（応永 14）年に建立されたものと伝えられ、国の重要文化財に指定されている。和洋と唐様を巧みに調和させた建築様式で高さは 27.6mである。桧皮葺の屋根と朱色の柱や垂木が美しいコントラストを見せている。

五重塔の隣に豊国神社がある。島内では最も大きな建築物で、畳 857 枚分の広さがあることから千畳閣とも呼ばれてきた。豊臣秀吉が 1587（天正 15）年に戦で亡くなった兵士への供養として、毛利家に仕える臨済宗の外交僧であった安国寺恵瓊（あんこくじえけい）に命じて作らせたといわれている大経堂である。しかし秀吉の急死によって工事が中止されたため神座以外は天井が張られておらず板壁もない未完成のままで現在に至っている。こちらも国の重要文化財である。千畳閣の縁の下は人が立って歩けるほど高いので、観光客は縁の下を歩いている。

明治維新後の廃仏毀釈で仏像は大願寺に移され、その後、秀吉と加藤清正を祀るようになり、豊国神社となった。

五重塔（左）、豊国神社（右）

町屋通りと清盛通り

厳島の代表的な通りが、表参道商店街（通称清盛通り）とひとつ山側の町屋通りである。豊国神社から階段を下り、町屋通りを歩く。観光客はまばらで生活道路といっていい。２階建ての古い家が立ち並ぶ。京都の町屋と同じように間口が狭く、縦に細長い建物で、通り庭と称する土間が入口から奥に続いている。もちろん中に入ったわけではないが、宮島歴史民俗資料館の資料に間取りが書いてあった。

大学の同級生で、「小鯛の笹漬け」で知られる小浜海産物㈱の社長を継ぎ、長いこと小浜商工会議所の会頭を務めた上野清治君の家が町屋づくりであった。残念ながら彼は昨年３月に亡くなった。福井県小浜は京文化の影響を強く受けた町であったが、親から引き継いだ上野君の家はまさに京風の町屋づくりで、学生時代、彼の家に一晩泊まったことがある。この時に町屋というものがひどく焼き付いていたので、厳島の町屋通りを歩くと、家の内部の構造が頭に浮かぶのだった。

町屋通りから清盛通りに入ると、人が一挙に増えた。朝方、通った時にはまさにシャッター通りであったが、昼近くになり観光客でごった返している。コロナ禍以前であれば、もっと多いのだろうが、小中学校の修学旅行生が目立つ。話しかけた中学生は兵庫県から来たと

いっていたので、関西方面が多いのだろう。

土産物屋はもみじ饅頭を売る店が圧倒的に多く、これに杓子などの木工品を売る店が目立つ。店員が盛んにもみじ饅頭を勧めている。飲食店はカキとアナゴ飯の看板を掲げた店が多い。この時期、カキは採れないから冷凍ものが使われているのだろう。広島県漁連では「カキ小町」というブランドの３倍体（産卵しないので夏でも食べられる夏ガキ）の普及を目指しているが、後ほど宮島漁協の組合長に聞いたところでは、三倍体は種苗費（１枚 70 円）が高く、歩留まりも悪いというから、３倍体のカキではないだろう。

商店街には 70 軒ほどの店が軒をつられているが、昼飯はアナゴ飯を食うことでは意見が一致していたので、通りを物色し、美味そうな店を探す。店頭でアナゴを焼いている店があったので、ここに入る。「いな忠」という店だった。矢部君は道すがら好きなウイスキーを飲んでいたので、ビールは飲まず、私は喉が渇いたから生ビールを一杯飲む。

町屋通り（左）、清盛通りの商店街（右）

カープタクシーと砲台跡

昼食を食べてからフェリー乗り場の前にある廿日市市役所宮島支所を訪ね、住民基本台帳上の人口と世帯数を聞く。6 月末時点の人口は 1,468 人、世帯数は 785 戸とのこと。国勢調査時よりもさらに減っている。また宮島の小中学校の在校生は、小学生が 90 人、中学生が 35 人であり、３割が島外から通学しているらしい。

厳島を一周する海岸道路をつくる計画が以前あったそうだが、環境への影響を考慮して断念している。したがって島を一周する道路はなく、島の北東側半分に海岸に沿った道路が整備されている。南西側半分は険しい山が続き自然がそのまま残る。ただ北東部の道の総延長は 10 ㎞以上もあるため、歩くには暑いし、時間もない。島にはレンタカーがないのでタクシーを利用する他にない。ところが宮島カープタクシーという会社が運営するタクシーは１台しかない。宮島支所で話を聞いてからフェリー乗り場前のタクシー乗り場に行くと唯一のタクシーが止まっていた。すぐに乗り込む。運転手は 1947 年生まれで、われわれと同学年の女性ドライバーであった。なおメイプルライナーと呼ぶ８人乗りの乗り合いタクシーもあるが、これは宮島水族館と包ヶ浦を結ぶ定期バスのようなもので、包ヶ浦より先にはいかない。

シマダスの地図をみると、厳島の南東に青海苔浦という場所があり神社のマークが示されている。ここまで行きたいと告げると、途中の大砂利というところまでは行けるがその先

はガードレールもなく、何台も車が転落しているので、現在は通行止めになっているという。仕方なしに大砂利まで行ってもらうように頼む。

島の北に包ヶ浦（つつみがうら）という場所があるが、ここには桟橋があり以前広島とを結ぶ船が発着していた。この桟橋から少し下がったところに海水浴場とキャンプ場、テニスコートなどが整った包ヶ浦自然公園があり、とても風光明媚な場所だったが、海水浴客は１人も見かけなかった。

タクシーは曲がりくねった細い山道を登っていく。運転手が山の中に砲台跡があるというのでタクシーを道路脇に停めて、山道を歩くことになった。彼女の後について歩く。彼女は子供の頃に陸上の選手だったといい、スタコラどんどんと先に行くものだから、必死の思いでついて行くことになる。同級生なのに体力差は歴然としている。かれこれ 10 分登ると、見晴らしのいい場所に海軍省と刻まれた古い石柱が立っていた。眼下に安芸灘が拡がり、島々を一望できる。

ここからさらに５分ほど歩くと、井戸やトイレ跡、兵舎跡、砲台跡が残っていた。この砲台は鷹ノ巣山高砲台といい、広島湾と呉軍港を防衛するための広島湾要塞の一つで、28 ㎝榴弾砲が６門置かれていた。1898（明治 31）年７月に着工し、1900（明治 33）年５月に竣工している。しかし豊予要塞の完成に伴い 1926（大正 15）年８月に廃止になっている。

砲台跡からタクシーを停めていた場所まで戻ると、「13 時 30 分に予約が入っているので、すぐに先方まで行け」との連絡が会社から入った。老人を病院まで連れていく予約だったようで、運転手は砲台跡の案内に夢中になり、この予約のことを忘れていたのだ。こちらとしては目的の大砂利の集落まで連れて行って欲しいのだが、病人の輸送とあってはそちらを優先せざるを得ず、すぐにＵターンすることになった。結局、大砂利まで行くことができなかったが、後述するようにこの集落はロープウエーから翌日見ることができた。

トイレの跡（左）、28 ㎝榴弾砲の砲台跡（右）

宮島漁協

途中の杉ノ浦でタクシーを降り、宮島漁協を訪ねる。大越剛組合長はちょうど広島県庁から来た職員と対応中で、話が終わるまで付近のカキ養殖の作業場を見学し、時間をつぶす。漁協の玄関前ではカキの浮遊幼生の調査にやってきた別の漁協の職員が機材を整理しているところだった。広島湾ではマガキの産卵期に当たっていた。

県の担当者が辞去したところを見計らって 14 時 30 分から 30 分ほど話を聞く。

宮島で漁業を営む人々は、この杉ノ浦周辺に住んでいる。明治の初めの頃、広島県内の離

島から移住してきたようだ。大越組合長の曾祖母は下蒲刈島の出身、祖父は能美島から来たという。厳島は神の島であったから明治時代以前は土地を耕すことが禁止され、農業は全く行われていなかった。1877（明治 10）年ごろから江田島や能美島、蒲刈島からの移住者によって農業が始められたが、鹿や猪などの鳥獣被害に悩まされたことから、当初の半農半漁の生業から漁業とカキ養殖にウエイトが移っていったものと思われる。

組合員は正が 25 人、准が 20 人の合計 45 人である。職員は正が１名、パートが２名の合計３人体制で何れも女性だ。営む事業は主として購買事業であり、漁業関連資材を供給している。

宮島漁協のメインはカキ養殖で、現在８経営体が営んでいる。以前は 11 経営体いたが、後継者がいない３経営体がやめた。カキ養殖経営体の多くは会社組織になっている。組合長は丸秋水産だ。カキ養殖以外の漁船漁業は、刺網、タコツボ、アナゴ筒、一本釣りなどが営まれている。刺網を営むのは３経営体で、残りの４経営体は刺網以外の漁業を組み合わせ兼業している。准組合員は主として一本釣りを営む。

厳島の名産品はカキとアナゴである。カキは島内の需要に対して供給量が圧倒的に多いので、島内の飲食店で使われているカキはほぼ全て宮島産であるが、アナゴについては地元で筒漁業が行われているものの、需要が圧倒的に多いので、島内の飲食店で使われているアナゴのほとんどは中国から輸入された冷凍ものだという。

宮島漁協の建物（左）、厳島港の杉ノ浦の漁船船溜まり（右）

カキ養殖

厳島のカキ養殖の経営体は杉ノ浦の漁協周辺に固まっている。漁協背後の海面は埋立地になっていて、ここにカキ養殖の作業場、資材置き場、カキむき場などが集約されている。またこの埋立地の北側にも森脇水産、沖野水産、丸美水産などのカキ養殖業者の作業場がある。つまり大きく２つに分かれていることになる。

丸秋水産と丸金水産の２社の作業場では、浮遊幼生のコレクターとして使用するホタテガイの殻を針金に通す作業が行われていた。浮遊幼生が発生しているこの時期にコレクターを海に吊るして採苗するためである。

丸秋水産の作業場では、フィリピン人の女性５人と男性１人が働いてきた。男性は日本に来て 19 年になるという。現在、８つの厳島のカキ業者のもとで約 70 人のフィリピン人が働いているそうだ。今の時期はコレクターづくりをしているが、秋口からはむき身作業に入る。ちなみに厳島のカキ養殖場で働く外国人は中国人、ベトナム人を経て、現在はフィリピ

ン人に置き換わっている。全員が厳島にあるカキ養殖業者の寮で生活を共にしている。組合長の家ではフィリピンから家族で８～10 人来ており、日本国籍を取った日系３世もいるとのこと。ちなみに対岸の地御前（じごぜん）ではインドネシア人やベトナム人が多いという。このようにカキ養殖の労働力を外国人に依存するようになってから 20 年以上が経つとのことで、もはやカキ養殖は外国人労働力なしには成立しない状態になっている。

カキ養殖の区画漁業権漁場は島の周囲である。厳島周辺には宮島漁協以外にも本土側の地御前、大野や阿多島（あたじま）などの漁協の漁場ともなっている。宮島漁協では１経営体あたり 20～30 台の筏を行使している。1 台の規模は 10×20mのサイズで、孟宗竹が使われている。

厳島は山が深く水量が豊富で、島内の河川は渓流を思わせる急な流れだ。カキの餌は珪藻であり、珪藻の生産を支える３大栄養素はN、Ｐ、Si である。赤潮や貝毒の原因となる渦鞭毛藻はNとＰが不可欠だが、Si は不要だ。大都市に位置する広島湾はN、Ｐが豊富だから渦鞭毛藻の生産には都合がいいが、カキの餌としては不都合である。ところが厳島から大量に供給される Si が珪藻の発生を促し、まさにカキの生産を支えていることに、厳島の渓流を視ながら実感したのであった。厳島周辺海域が日本一のカキ養殖産地たらしめているのは、まさに厳島に蓄えられた陸水であった。地表には Si が圧倒的に多いから陸水には Si がたくさん含まれている。一方海水中には少ない。つまり海洋では Si が時として珪藻の生産を左右する制限因子になるが、厳島周辺海域では制限因子になることはなく、餌プランクトンの珪藻は常に潤沢といえる。

カキの種苗は基本的に地種（じだね）が使われているが、宮城県産のものも使われている。宮城県産は翌年の 10 月から出荷可能だが、地種だと少し遅い 11 月ごろからになるので早く出荷したいためだ。なお、最近はチヌやフグによるカキへの食害が目立つという。

厳島で生産されたカキのうち島内で消費されているのは１～２割程度で、残りは主としてクニヒロや山下などの問屋ルートで流通している。問屋は筏１台分をまとめて購入しているそうだ。

フィリピン人によるコレクターづくり（左）、カキのむき身作業場（右）

宮島伝統産業会館

タクシーがないから、杉ノ浦からフェリー乗り場まで歩かなければならない。

杉ノ浦から坂を登り、下ったところに幼稚園、さらに小中一貫校の廿日市市立宮島小中学校（宮島学園）があった。上述したように島内の子供が少なくなっていることから、島外にも門戸を開いており、島へ通学する児童生徒が３割ほどを占めている。

長浜神社を過ぎ、フェリー乗り場の前に宮島伝統産業会館がある。建物は３階建てで、１階が杓子、宮島彫り、ロクロ細工などの木工品の展示販売、２階でもみじ饅頭の手焼き体験、３階で杓子づくりと宮島彫の体験が行われている。体験は予約が必要で主に修学旅行生が対象、所要時間は１時間ほどだ。

宮島細工と呼ばれる木工品には、杓子、ロクロ細工、宮島彫などがある。それぞれの木工品について紹介しておこう。

杓子は寛政年間（1789～1800 年）に光明院の修行僧誓真によって作られ、島民に作り方を教えたのが始まりと言われている。琵琶の形で、材木はホウが用いられた。ホウは飯に香がうつらず、杓子に米粒が付着しにくく、熱い飯にも曲がらないという特徴を持っていた。全国的に宮島の杓子が有名になるのは、日清戦争の時に全国から招集された兵隊が宇品港から出征する時に「敵をメシとる」といって、杓子に自分の名前を書いて厳島神社に奉納し、そして勝利の記念として故郷への土産に持ち帰ったことだという。

宮島彫は神奈川県の鎌倉彫に似ている。江戸時代の終わりの頃に甲州から厳島に来ていた波木井昇斎という人物によって木彫りの技術が伝えられた。昇斎のもとで島民が技術を習得し、広まった。材はサクラ、トチ、ケヤキ、クワなどが用いられている。

ロクロ細工は寛永年間（1848～1853 年）に厳島に伝えられ、伝来後 20 年ほどしてから本格的な生産が行われるようになった。板盆、菓子器、茶入れなどに加えて、最近では茶道用の盆、棗、銘々皿などが作られている。

杓子の製造工程の展示（左）、ロクロ細工の展示（右）、何れも宮島歴史民俗資料館蔵

細工物の原料の木は島内で伐採された。ただ江戸時代は勝手に伐採することは禁じられていた。江戸時代後期には厳島に 200 人ほどが木こりとして働いていた。伐採地は主として島の反対側にあたり、木こりは船で現場に行き、仮小屋をつくって作業にあたったといわれる。明治維新後、山林の管理は藩から国に移ったが、山仕事に従事する人は一段と増え 300 人に達したため、弥山の原生林を除くと、山は丸坊主になるほどだったという。1997（明治 30）年の森林法の制定により伐採が禁止されると木こりはいなくなり、原料を島外から調達して細工物は継続した。

かつて厳島の市街地にはたくさんの木工所があったが、今ではすっかり姿を消してしまった。土産物として売られている木工製品のほとんどは島外で生産されたもののようだ。帰り際に、杓子を１本購入した。

16 時 10 分のフェリーで宮島口に戻り、宮島コーラルホテルにチェックインする。朝早く

から歩き回ったせいで汗をかいた。ホテルの風呂に入り、夕方まで休む。

レストランＡＫＡＩ

この日は、広島営業所の前所長の深瀬君、現所長の吉永君と矢部君の合計４人で、深瀬君の甥っ子（お姉さんの次男）が経営する店で夕食を共にすることになっていた。18 時 50 分ごろＪＲ宮島駅で待ち合わせ、レストラン AKAI に向かう。AKAI は宮島口から歩いて 10 分ほどの高台にある古民家を改装した和洋折衷のレストランで、カウンター席が８席のみの小さな店だ。ランチとディナーがあり、完全予約制になっている。

オーナーシェフの赤井顕治さんは、若い才能を発掘する料理人のコンペティション・「REDU－35　2017」でみごとグランプリに輝いた日本を代表する若手シェフである。フランスでの２年間の修行を経て、日本に戻り、アーククラブ迎賓館広島に勤務ののち、2019 年５月にこの店をオープンした。ちょうど２年余が経ったところだ。オープンキッチンになっており、彼が料理を作るのを眺めながら、シャンパン、ワイン、日本酒を飲む。当日のメニューを紹介しておこう。

スッポンのスープ、イワモヅクとイワガキ、海ウナギの焼き物と胡瓜、アワビの葛かけズッキーニ添え、ヒグマ肉のハンバーグマッシュポテト添え、マナガツオ、エゾシカのステーキ、タチウオとグリーンアスパラの炊込みご飯、アイスクリーム、プリン、コーヒー

生まれて初めて食べたのがヒグマの肉と海で獲れた天然のウナギであった。ちなみに本州に生息するツキノワグマの肉は何回か食べている。シカの肉は調理が難しい。高温で加熱すれば堅くて食べられなくなる。低温でじっくり焼く必要があるが、AKAI のシカステーキは見事な出来栄えであった。

赤井シェフは若いから様々な素材にチャレンジしているようだ。日々、研究に余念がない。われわれは彼の成長過程を大いに支えているのかもしれない。料理のセンスは一朝一夕で磨かれるものではない。恐らく育った家庭環境に大きく左右されるだろう。器やグラスを選ぶセンスも共感するところが大きい。

話は変わるが、このレストランで働いている女性従業員は厚木市の出身で、しかも同じ団地だったのには驚いた。世の中にはこのようなことが多く、鹿児島県の沖永良部島の食堂でも同じ団地で生まれた女性に会ったことがある。

赤井シェフを囲んで記念撮影（左）、アワビの葛かけズッキーニ添え（右）

令和３年７月 13 日

紅葉谷公園

宮島口から８時 00 分発の松大フェリーに乗り、厳島に渡る。ロープウエーの始発は９時なので時間には余裕があった。フェリーの発着場から海岸沿いの道を歩き、大小路、町屋通りを経て、五重塔の下を通るトンネルを抜け、ロープウエー乗り場まで歩く。途中無料バスの停留所があったが、朝早いためまだバスは動いていない。乗り場は紅葉谷公園の先だが、公園の入口あたりに「岩惣」という 1854（安政元）年創業の老舗旅館があった。おそらく厳島一の旅館で、過去には皇族方や著名人が数多く宿泊している。

ところでもみじ饅頭は広島の菓子としてきわめて著名だが、この菓子はじつは 1907（明治 40）年に岩惣の女将が厳島の和菓子職人高津常助（1886～1951 年）に紅葉谷の名にふさわしい菓子をつくれないかと依頼し、高津が考案したのが始まりであった。カステラの生地に餡を包み、モミジを模（かたど）った型に入れて焼き上げたものだ。この厳島に来るまで、もみじ饅頭の発祥が厳島であることも、岩惣であることも知らなかったので、認識を新たにした次第である。深瀬君から岩村屋のもみじ饅頭が手作りで評判だと聞いており、帰りに買うべく所在地を島で聞いていたのだが、残念ながら時間がなくて買えなかった。

紅葉谷公園の中を渓流が流れ、緑のモミジもまた趣がある。岩惣の古風な建物は自然と調和している。島であることを忘れさせる風情だ。公園を登り詰めて、橋を渡るとロープウエーの紅葉谷駅があった。

紅葉谷公園の緑のモミジ（左）、紅葉谷公園を流れる渓流（右）

宮島ロープウエー

紅葉谷駅を出発したロープウエーは途中の榧谷駅で乗り換えて、頂上の獅子岩駅まで行く。紅葉谷駅から榧谷駅までは８人乗りの小型客車で、この路線は紅葉谷線と呼ばれ、一定間隔で客車が循環する仕組みになっており、運行間隔は約１分である。榧谷駅からは 30 人乗りの客車に乗り換えて終点の獅子岩駅まで行く。こちらの路線は獅子岩線と呼ばれ、２台の客車が交互に往復する交叉式である。運行間隔は約 15 分で、所要時間は約４分だ。乗り換え時間を含めて、紅葉谷駅から獅子岩駅まで 20～30 分を要する。料金は往復 1,840 円であった。

昨日まで定期点検が行われ久しぶりに運行が再開されたことやコロナ禍で観光客が少ないことも影響してか、紅葉谷駅には私以外に乗客はいなかった。そのうち地元の 60 歳代の

おばさんがやって来た。始発便に乗って榧谷駅まで行き、乗り換えで客車の中で待っているとこのおばさんが次の便でやって来て、さらにサラリーマンらしき人が乗り込み、３人が頂上の獅子岩駅に向かった。ロープウエーからは広島市内や江田島などの島々が一望でき、素晴らしい眺めである。

中継地の榧谷駅（左）、終点の獅子岩駅（右）

大砂利の集落

昨日、タクシーの都合で行くことができなかった大砂利の集落がロープウエーから見ることができた。厳島では明治以前には農業が禁止されていた。したがって農地はなく人が住むのは神社周辺に限られていた。明治初期に上述したように杉ノ浦に周辺の島々から移住したが、戦後の開拓民として入植したのが大砂利の集落である。

以前は 10 戸ほど住んでいたようだが、カープタクシーの運転手の話では、現在、２戸住んでいるとのことだ。1 戸は農業を営み、もう１戸は宮島総業というごみ処理の会社を営んでいるという。

大砂利の集落（左）、獅子岩展望台と弥山山頂（右）

弥山

矢部君はホテルの部屋で大谷翔平選手が出場する米国のオールスターゲームを観ていて、厳島行には同行せず、11 時 10 分に宮島口を出発する電車で合流して大阪に行くことになっていた。ホテルに預けておいたバックパックを受け取る時間を考慮すると 10 時 40 分までには厳島を出発するフェリーに乗らなければならない。

弥山は厳島の最高峰で標高は535m、弘法大師・空海が開基した霊山である。当初は弥山山頂まで登る計画であったが、獅子岩駅から弥山までは大した山岳行ではないと高を括っていたのが誤算だった。現地に着いて初めて考えの甘いことに気が付いたのである。ロープウエーで一緒だったおばさんは杖を２本もっている。弥山本堂まで用事があって行くようで、おばさんが案内してくれるというので一緒について行った。

獅子岩駅から険しい下り道になり、麓からの登山道（紅葉谷ルート）に合流したところに弥山原始林と書かれた看板が立っていた。大正２年に弥山に登ったベルリン大学のアドルフ・エングラー教授がこの地の植生にいたく感激し、彼の強い勧めで三好学博士がこの地を天然記念物に指定するよう進言し、1929年に国が指定、1957年に特別保護区になったという。弥山の北斜面158.7haはツガ、アカガシ、シロガシ、ツクバネガシなどを伴うアカマツ林で構成され、瀬戸内海の島に残る極相林として貴重だという。

ここが谷で再び険しい登りとなった。下りはいいが同じ道を帰りは登らなければならない。どうも往復の時間を考えると、弥山の山頂までいくと予定の時間を大幅に上回り、矢部君に迷惑をかけそうなので、弥山の下にある弥山本堂でUターンすることに計画を変更した。おばさんは本堂にはよく来るらしく健脚である。後について歩く。本堂に着くと、坊さんがおり、おばあさんを迎え、挨拶を交わしている。

弥山本堂は求聞持（くもんじ）堂とも呼ばれ、真言密教の日本三大道場の一つに数えられている。またその前にある不消霊火堂には弘法大師の修行当時から燃え続けているとされる聖火があり、最近は恋人の聖地などと野暮な名前がつけられている。本堂に参拝してから、少し登ったところにある三鬼堂に寄り、すぐに獅子岩駅に引き返した。

弥山本堂（左）、霊火堂（右）

獅子岩駅に着くとちょうどロープウエーが出たばかりだった。次の便まで15分待たなければならない。獅子岩展望台に登って眼下を眺める。

紅葉谷駅に着いてから坂道を速足で下り、厳島を10時55分に出発するＪＲ西日本のフェリーに飛び乗る。宮島コーラルホテルで預けておいたバックパックを受け取り、宮島口へ。予定の時間を過ぎて矢部君と交流し、広島駅経由で大阪に向かった。

【文献】

廿日市市（2020）：神をいつきまつる島づくり、宮島まちづくり基本構想、pp. 70.

廿日市市（2019）：宮島地域シカ保護管理計画（第２期改訂版），pp. 33.

宮本常一（2014）：4. 宮島，瀬戸内海Ⅰ広島湾付近．私の日本地図．未來社、東京．70-91.